

8月2日 年間第18主日

出 16:2～15 エフェ 4:17～24 ヨハ 6:24～35

1. ヨハ

v.27 「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくなるしないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。」

私たちは今朝このテキストから、“食べて満腹するパン”ではなくて、“永遠の命に至る食べ物”があることを教えられ、それを得るために働くようにと勧められています。この“永遠の命に至る食べ物のために働く”ということ学ぶために、私たち一同はミサでこのテキストの朗読を聞くのです。

ユダヤ教におけると同様にキリスト教でも、人は“神に喜ばれる善い業”を行うことによって、神から報いを得ることが出来るのだという理解が、多くの信者の心を支配しています。信仰と並んで、時には信仰以上に“善い業”が強調されることは、カトリック教会も含めてキリスト教諸派の発言にしばしば見られる現象です。それらは常に、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」(v.28)という問と解答の試みの数々であると言うことが出来ます。

v.29 「イエスは答えて言われた。“神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。”」

私たちはミサをささげることについて、奉献文の中で、“これはあなたがたのために渡されるわたしのからだ”、“これはわたしの血の杯”という主の言葉を聞きます。カトリック教会はその典礼刷新によって、かつて“聖体拝領”と称していたものを“交わりの儀”と呼ぶようになりました。ミサは“ことばの典礼”と共に“感謝の典礼”によって“福音を学び、分かち合う交わり”を生み出すものであるからです。

私たちはキリストの祭壇のもとに集まって、イエス・キリストが得させてくださる救いに信頼して“神のことば”を聞き、“キリストのからだと血”を受けるのです。これは最早“神から報いを得るための人間の業”ではなくて、神が与えてくださる永遠の命を信仰によって受けることに外なりません。

しかもこの“イエスのもとに来る”ことも、“イエスを信じる”ことも(v.35)、究極的には人間の業ではなくて、全く“神の御心”(6:40)に依存していることを忘れてはなりません。

聖書を熱心に学び、福音をより深く理解するという、生涯にわたる努力がすべての信者に期待されているのは、それなしには正しい信仰に近づくことが出来ないからです。神の啓示に関する教義憲章が述べている通りです。「実際、聖書を知らないことは、キリストを知らないことである。それで、喜んで聖書に親しまなければならぬ。」(25)

2. エフェ

vv.20-21 「しかし、あなたがたは、キリストをこのように学んだのではありません。キリストについて聞き、キリストに結ばれて教えられ、……」

異邦人の“愚かな考え”(v.17)と、キリスト者の新しい生き方を対比する場合に、単なる道徳的、あるいは文化的レベルの少々の違いにしか過ぎないものを、誇大に評価することがしばしば行われて来ました。何らかのレベルの違いを、うぬぼれや、逆に劣等感の動機にすることは、私たちの身近な体験の中によくあることです。残念ながら、そのような思考の枠の中で聖書を読んでいると、表の顔は聖人で、実態は偽善者であるような、そんな二重人格的なクリスチャンが育つこととなります。

「キリストについて聞き」ということを、西欧的な倫理や価値観に見倣うことのように、安易に考えてはなりません。使徒パウロは“最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは……、キリストがわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、復活したこと”であったと言いました(Ⅰコリ15:3-4)。私たちがキリストについて聞くとは、使徒たちが宣教した福音に耳を傾けることであって、それを間違えて、単に道徳的に、あるいは文化的にレベルが高くなるというこで置き換えてはならないのです。

「キリストに結ばれて教えられ」ということも、私たちがキリスト教的思想や文化に通じることと、決して同じではありません。「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです」(Ⅱコリ5:17)とは、「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラ2:19-20)ということなのです。

3. 出

v.12 「あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であることを知るようになる。」

このことを抜きにしては、「天からのパンを彼らに与えて食べさせた」(ヨハ6:31)ことは、主の民にとって何の意味も持ち得ませんでした。

全世界のどこでも、私たちキリスト者はミサを通して、“ことばの典礼”と“感謝の典礼”によって、“永遠の命に至る食べ物”(ヨハ6:27)を受けることが出来るのです。「あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてください(ロマ8:11)という御国の希望を与えてくださる神に、感謝と賛美！

ハレルヤ、アーメン。

8月9日 年間第19主日

王上 19:4~8 エフェ 4:30~5:2 ヨハ 6:41~51

1. ヨハ

v.42 「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、“わたしは天から降って来た” などと言うのか。」

イエスの生涯について学ぶことは、昔から教会における宗教教育の一つの形と考えられて来たようです。その場合に教師が教えるものは、おおむね建德的敬虔主義的に脚色されたイエス像であって、昔も今も、ほとんど学問的な批判に耐えるようなものではありません。18世紀後半に始まった史的批評的聖書研究によって、教会の伝統的な教えから切り離された、いわゆる史的イエスを再現しようとする数々の著作が現れて、人々の知識欲を満たして来ました。我が国で人気のある名著の一つにルナンの「イエスの生涯」(2000年/新訳)があります。

ところが、そのような“知っている”(v.42)という思い上がりに対して、イエスは答えて言われました。

vv.43-44 「つぶやき合うのはやめなさい。わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる。」

イエスは、天から降って来た生きたパンである(v.51)というのは、信仰のことがらであって、父の導きなしにはそこに至ることが出来ないと、イエスは言われるのです。「父から聞いて学んだ者は皆、わたしのもとに来る」(v.45)とは、「我々はその父も母も知っている」(v.42)と思い上がることは別のことなのです。

そして、さらに付け加えて言われます。

v.51 「このパンを食べるならば、その人は永遠に(つまり、来るべき世に)生きる。わたしが与えるパンとは、世を生きるためのわたしの肉のことである。」

キリストの十字架の死をそのように理解して、ミサをささげる教会は今朝も祈ります。

「全能永遠の神よ、私たちは聖霊によってあなたの子供としていただきました。あなたを父と呼ぶ私たちを、約束された永遠の命に導いてください。」(集会祈願)

2. エフェ

v.30 「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。」

当然のことながら、教会においていちばん大切な信仰教育は、「神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを」(1:6)信者がしっかりと学ぶことです。私たちキリスト者は、「この御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるのです。神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、秘められた計画を私たちに知らせてくださいまし

た。」(1:8-9) このような福音理解が会衆一同に共有されているということを前提にして、そうであればこそ、「神の聖霊を悲しませてはいけません」と言われているのです。なぜなら、「この聖霊は、私たちが神の国を受け継ぐことの保証」(1:14)だからです。

「あなたがたも愛によって歩みなさい」(v.2)という聖書の言葉を、このような福音理解が会衆一同に共有されるための、交わりと助け合いの勧めとして聞くことが大切です。いつの時代の教会でも実際には、信者への正しい信仰教育と、信者一人一人による福音理解ということが、しばしば軽んじられて来ました。そして福音とは何の関係もない“ただの善い業”に、人々は忙しくして来たのです。

3. 王上

そのような“ただの善い業”に、いつか人は疲れるものです。「万軍の神、主に情熱を傾けて」(19:10, 14)、ただ一人奮闘したエリヤでさえ、そうでした。

v.4 「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。」

しかし、私たちの主イエス・キリストを通して神に感謝(ロマ7:25)しましょう。神はいつも私たちをキリストの福音を聞くところに、導き返してくださいます。ちょうどエリヤを、モーセが律法を授けられた神の山に再び導き返されたように。

「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ロマ1:16)です。
ハレルヤ、アーメン。

8月16日 年間第20主日

箴 9:1～6 エフェ 5:15～20 ヨハ 6:51～58

1. ヨハ

v.56-57 「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。」

カトリック信者であればだれでも、これが私たちのささげるミサを指して言われていることを、理解するに違いありません。神が御子の受肉と受難と復活によって成し遂げられた大いなる救いが、そこで記念されるミサは、教会にとっても、また信者一人一人にとっても、その生活全体の中心であるからです。

ローマ・ミサ典礼書の総則はその冒頭で、「教会がキリストの死と復活の記念を行うとき、救いの力がわたしたちのうちに働きます」というレオ秘跡書の言葉を引用しています。第二バチカン公会議に始まる典礼刷新は、現代の教会がどれほど感謝しても感謝し足りない“聖霊の訪れ”(ピオ 12 世)でありました。しかし残念なことに、実際に私たちが参加する小教区のミサで、その“救いの力”、すなわちキリストの福音を、司祭が説教で語るのを聞くことは甚だ稀であると言わなければなりません。

「罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです」(II コリ 5:21)という和解の福音(同 5:19)は、現代人には無意味な過去の神話になってしまったのでしょうか。

宗教改革時代の有名なルター派の“アウクスブルク信仰告白”は、“教会は全信徒の集まりであって、そこで福音が純粋に説教され、聖礼典(聖体の秘跡)が福音に従って正しく執行せられるのである”と述べました。しかし、今日のプロテスタント教会の牧師の説教に於いても、「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25)キリストの福音が、純粋に説教されるのを会衆が聞くということは、非常に稀なのです。

そのような現実の中にあって、…… それは決して現代だけの特殊事情ではない!……、カトリック教会は“聖伝と聖書”を継承することによって、具体的には聖書と、ミサ典礼書を初めとする儀式書等によって、“神の義を得させる十字架の福音への信仰”を保持して来ました。

v.54 「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。」

ミサは、魔術ではありません。それは十字架の贖いに基づく“キリストの行為”であり、罪と死に勝利されたキリストの福音への信仰に基づく“神の民の行為”であって、そこには御子を信じる者に永遠の命を得させる“神の働きの頂点”があるのです(ミサ典礼書の総則 1)。

2. エフェ

v.17 「だから、無分別な者とならず、主の御心が何であるかを悟りなさい。」

何が主に喜ばれるかを吟味する(5:10)ということは、どのようにして可能なのかを真面目に考えましょう。それは、キリストの光に照らされることによってであると言われていています(5:13-14)。また洗礼を受けて救いに入れられた人は、今は主に結ばれて、光となっているとも言われています(5:8)。「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けた …… わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます」(ロマ 6:3,8)と、使徒パウロは言いました。

「自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きている」(ロマ 6:11)ということが、神が御子の受肉と受難と復活によって成し遂げられた大いなる救いへの理解なしに、ただの人間の善意や良い心がけだけで可能であると考えるのは愚かなことです。かつて“眠りにについている者”、“死者”であった人々に、“立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる”(5:14)と、呼びかけられているのです。それは、キリストの福音を学びなさいということではなくて何でしょう。

3. 箴

知恵は、「浅はかさを捨て、命を得るために、分別の道を進むために」呼びかけていると、ソロモンの箴言は諭しました。その呼びかけは、今も私たちに向かって語られています。そうです。キリストは、私たちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです。」(I コリ 1:30)

カトリック教会が今日まで受け継いで来た聖伝と聖書を通して、使徒たちは今も私たちに「神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。」(I コリ 1:24) 現代のどのような知識も学問も、思想や価値観も、キリストの福音を学ぶことの代用には、決してなり得ません。実に「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」(I コリ 1:25)

私たちのミサが、福音への良き理解を得た信者たちの、意識的、行動的、充実した参加によって、やがて豊かな実りを得るものになりますように(ミサ典礼書の総則 3、典礼憲章 11)。

ハレルヤ、アーメン。

8月23日 年間第21主日

ヨシュ 24:1～18 エフェ 5:21～32 ヨハ 6:60～69

1. ヨハ

今朝のテキストは、6:1 から始まったガリラヤでのイエスの宣教の結論部分であり、ヨハネによるいわば総括として語られています。(類似のものが、ヨハ 12:37-50 にもあります。)

v.62-63 「あなたがたはこのことにつまずくのか。それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば……。命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。」

私たちがミサでその御聖体にあずかるイエスは、「御自身の血によって、永遠の贖いを成し遂げられ」(ヘブ 9:12)、「天に上げられた」(使 1:9)方、今も「神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してください」(ロマ 8:34)キリストです。そしてただ聖霊だけが、これを受ける信者に命を与えてくださるのです。

感謝の祈り(奉献文)の中に、聖霊の働きを求める祈り(エピクレシス)があることに注目しましょう。ミサ典礼書の総則は、これを次のように説明しています。「この特別な祈りによって、教会は神の力を願い求め、人々の供え物が聖とされるよう、すなわち、キリストのからだと血になるよう、また、これを拝領することによって、汚れのないいけにえが、それにあずかる人々の救いとなるよう祈る。」(55ハ)

ミサ典礼書の総則が“聖変化(実体変化)”という言葉을避けて、“制定の叙述と聖別”と呼んでいることに関して、国井健宏神父は次のように述べておられます。「パンとぶどう酒が“いつ”“どのように”キリストのからだと血となるのかというのは、ある意味で方向を誤った問題設定である。」(共同体の祈り/1978年)「ミサで祝っているのは、物質の変化ではない。秘跡において起こることは、神の救いの働きが現在化されることであり……。」(ミサを祝う p.210)「ミサがキリストのいけにえを再現するものであることを、この部分がかつとも強烈に語っており、祈り全体が奉献文と呼ばれるゆえんである。」(同 p.215)

v.64 「しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる。」

それは、「初めから終わりまで信仰を通して実現される」(ロマ 1:17)理解であって、信仰のないところでは、ただのつまずきにしか過ぎません(マコ 6:5-6、1コリ 11:27-29、カトリック教会のカテキズム 1123,1127 参照)。

2. エフェ

使徒パウロが結婚という身近な具体例を使って語ろうとしているのは、“キリストと教会について”(v.32)であることに目を留めることが大切です。世間の現実では、夫婦が互いに愛し合っているなどという理想は、ほとんどの場合数年間で夢の彼方に消えてしまう場合が多いのですが、「キリストが教会を愛し、教会のために御自身をお与えになった」(v.25)ということは、「神がわたしたちの主キリスト・イエスによって実現され

た永遠の計画に沿うもの」(3:11)であり、「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方です」(ヘブ 13:8)。

「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です」(2:8)。私たちキリスト者がこのように信じることが出来ること、それ自体が神の賜物であることを感謝しましょう。

3. ヨシュ

v.15 「ただし、わたしとわたしの家は主に仕えます。」

v.18 「わたしたちも主に仕えます。この方こそ、わたしたちの神です。」

私たちは“拝領前の信仰告白”で、いつも次のように応唱します。

司祭 神の小羊の食卓に招かれた者は幸い。

会衆 主よ、あなたは神の子キリスト、永遠のいのちの糧、あなたをおいてだれのところに行きましょう。

欧米の教会によるいわゆる外国伝道によって、私たちは多くの宗教、多くの神々の中から、キリストを信心する決断をしたかのような錯覚を与えられて来たのではないのでしょうか。いったい父・子・聖霊なる神とその救いは、私たち人間が自由に決めることの出来る選択の対象なののでしょうか。

十戒の第一は、「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」(申 5:6)であって、決して“わたしは、あなたがたが選んだ神”ではありませんでした。ですから「もし主に仕えたくないというならば」(v.15)とは、“もし、この救いの恵みの事実を、感謝して信じることが出来ないなら、そのような人は……”という意味に理解しなければなりません。

ですから、「わたしたちも主に仕えます。この方こそ、わたしたちの神です」とは、感謝の信仰告白なのです。私たちがミサで、「主よ、……あなたをおいてだれのところに行きましょう」と告白する信仰そのものが、実は神の賜物であって、そもそも神の「輝かしい恵み」(エフェ 1:6)であることを知って、大いに感謝しようではありませんか。「わたしは、キリストと教会について述べているのです。」(エフェ 5:32)

ハレルヤ、アーメン。

8月30日 年間第22主日

申 4:1~8 ヤコ 1:17~27 マコ 7:1~23

1. マコ

v.8 「あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを固く守っている。」

ユダヤ教の世界には、律法学者による聖書の解釈が強力に浸透していて、この聖書解釈は聖書と並んで、あるいは聖書を超えさえて、人々の生活と思考を支配していました。ここで「人間の言い伝え」と呼ばれているものは、このような権威ある聖書解釈のことです。イエスはこのすべての「言い伝え」を、人間の業として拒否したと、福音書は伝えています。

使徒パウロは、「キリストは律法の目標であり」(ロマ 10:4)と述べて、キリストの福音の新しい言い伝え(ケリュグマ)こそが、今や旧約聖書における律法の唯一の正しい解釈であると主張しました。まさにこの“キリストの福音の新しい言い伝え”を、教会は今日に至るまで聖伝と聖書によって受け継いで来たのです。ですから私たちは“カトリック教会のカテキズム”を、すべての信者を聖伝と聖書へ導くいわば序論と考えるべきであって、これだけで完結した教科書のように思ってはなりません。

v.15 「人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」

このイエスの言葉が、初代教会の歩みの中で、その実体験を通して繰り返し思い起こされたに違いないと、私たちが推測するに足る資料がかなりあります。私たちが福音書で読んでいる vv.18b-19, 21-23 は、そのような初代教会の体験を反映しているように思われます。このリストの中にある“ねたみ”が、特に私たちの関心を誘うのです。

2.

新約聖書の、特にパウロに関わりのある部分で、この“ねたみ”がしばしば出て来ます。古くからローマの獄中で書かれたと考えられているフィリピの信徒への手紙に、この“ねたみ”があからさまに言及されています(1:15)。使われているギリシア語の単語にはいろいろあるのですが、この場合には単なる“うらやましく思う”とか“嫉妬する”という意味ではなくて、“競争心／党派心”という意味です。

これは一種の群集心理のようなもので、普段は隠されているのですが、ひとたび対抗する相手が登場すると、その攻撃的な性格が出現するのです。使徒パウロは、エルサレム教会のユダヤ人キリスト者によるこの種の“ねたみ”に、繰り返し悩まされていました。そして、その生涯の最後の目標であるローマ行きに備えて書いた手紙の中でも、この“ねたみ”を危惧していました(ロマ 15:31)。ローマの第四代教皇であった聖クレメンスの手紙は、このような“ねたみ”に動機づけられた一部の信者の行動(恐らく彼らの側からの通告)が原因となって、最終的に使徒ペトロと使徒パウロのローマでの殉教が結果したことを、かなり強く推測させます。

私たちに身近な現代の日本でも、カトリック信者とプロテスタント信者の間に、それと思い当たるものを経験したことのある人が、きっといることでしょう(エキュメニズムに関する教令 24 参照)。

3. ヤコ

v.17 「良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父から来るのです。御父は、御心のままに、真理の言葉によって私たちを生んでくださいました。」

v.21 「この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。」

「昔の人の言い伝えを固く守る」ことが、敬虔なユダヤ人の標語であるように、私たちがキリスト者であることの標語は、“聖伝と聖書を通して神のこぼれを学ぶ” こと以外にはあり得ないのです。

4. 申

v.2 「あなたたちはわたしが命じる言葉に何一つ加えることも、減らすこともしてはならない。」

教会にとって、聖伝と聖書が啓示の源泉であるとは、そういうことです。これを古い旧約時代の一発言に過ぎないなどと思ってはなりません。神の右に挙げられたキリストが、今に至るまで使徒たちの宣教(ケリュグマ)の背後に立っておられることを、ヨハネ黙示録は明確に宣言しているではありませんか(22:18-19)。

「確かに知恵があり、賢明な民である」(v.6)と評価されることは、いつの時代にも、すべてのキリスト者の目標です。「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉(ケリュグマ)を聞くことによって始まるのです。」(ロマ 10:17) 「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。」(ロマ 7:25)

ハレルヤ、アーメン。